

ハイデルベルク信仰問答より

問 59 けれども、あなたがこれらすべてのことを信じると、そのとき、どのようにあなたを益するのですか。

答え それは、私が神の御前で、キリストにあつて義であり、永遠の生命の世継ぎである（ローマ 1:17、5:1、ヨハネ 3:36）ということでもあります。

ここから本問答書は新たな展開へと向かいます。ここまで使徒信条の内容が丁寧に解説されてきましたが、「これらすべてのこと」とそれをまとめ、ではその全体を告白するとき私たちにはどのような益が与えられるのかということを問うているのです。再び本書で特徴的な「益」が出てまいりましたが（「助け」朝岡）、これは、信仰を告白することが決して絵空事ではなく、私たちの全生活に関わる実践的なものであることを深く心に刻もうとしているのでしょう。何度も何度も「使徒信条を唱えることは、あなたにとって益になるんだよ」と教えているのです。

さて、「答え」には二つの要素が含まれていることが分かります。

- ① キリストにあつて義であり
- ② 永遠の生命の世継ぎである

これらのことは既に学んできましたので重複する部分もありますが、繰り返し聞く必要があるでしょう。この答えでは、注意深く「神の御前で」という修飾句が添えられています。私たちが自分で自分を義としても仕方がない（できない）のです。神によって義とされ、神の御前で義でなくては。この「義」は受動的に与えられるものであって、「自己義認」ではありません。私たちは自分で自分を救うことができないのであり、第三者による人生への介入がどうしても必要なのです。それを果たしてくださったのは主イエスであり、私たちに福音を語りかけ、それを信じるに至らせてくださいました。そして、主イエスだけが持つておられる義の衣を着せてくださいました。その衣は主イエスの血で洗われており、罪人のすべての罪を覆い隠します。だから、私たちは「キリストにあつて」義とされているのであり、キリスト抜きには義とはなりえないのです。

神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて神の義となるためです。（Ⅱコリント5:21）

ここで使われているあまりにストレートな表現に、読者は驚愕させられるでしょう。キリストが「罪とされた」、私たちが「義となった」と言われているのです。「罪ある者とされた」「義なる者となった」と言ってもよさそうなところを、パウロは敢えて直接的にキリストを「罪」、私たちを「義」と描きました。十字架において、主イエスと私たちの神の御前

における立場が入れ替わったのです。主イエスが有罪判決を受け、それに免じて私たちは無罪とされた。このことをパウロは何としても伝えなかったのでしょうか。

補足として、主イエスは永久に「罪」とされ続けたのではなく、復活によって再び永遠の義を取り戻されました。

私たちが「**永遠の生命の世継ぎ**」であるとは、神の子として永遠に神のものであり続けること、そのすべての良きものを受け取る権利が与えられているということです。これは「義とされた」者だけに与えられる特権であり、神とともにある永遠の安らぎ、喜び、楽しみ、満足……で満たされたいのちです。

最後に、「義とされる」ためには信仰が必要であることが「問い」の中で強調されている点に注目しましょう（**これらのことを信じると**）。私たちは使徒信条を唱えるとき、それを信じているのでしょうか。ただ暗記したことばを脳裏から懸命に紡ぎ出すだけであつてはならないと、私も常に自分に言い聞かせています。この一つひとつのことばを信じて告白しよう。いつも新鮮な思いで使徒信条を唱えよう。そこに私の永遠への思いを精一杯乗せてみよう。そんな意識で使徒信条を口ずさみたいと思います。